

伊東玉美著

『宇治拾遺物語のたのしみ方』

佐藤 信 一

伊東氏による『宇治拾遺物語』入門書である。目次を掲出しておく。

はじめに

I 『宇治拾遺物語』のできるまで

II 粘る女―最後に残るもの―(観音靈験譚)

III 助けた亀―遠回りの意味―(動物説話・報恩譚)

IV 黙る男―評価する人・される人―(笑い話)

V 差出人の分からぬ知らせ―思わぬ時から運命は―(夢説話)

おわりに

文献一覧

この本の特徴の一つとして、『宇治拾遺物語』の各説話の引用が、原文ではなく簡潔な現代語訳でなされているということに指摘できると思う。書名に「たのしみ方」とある所以でもあろう。また目次の掲出では省略したが、小項目として「孔子様はダメな人？」や「笑う群衆」、「思わぬ時から運命は」などの興味を引かれる命名が為されている。この点も古文に対してハードルを下げる有効な手立てとなっている。また、文献一覧であるが、文献に通し番号が振られており、本文の叙述から

どの研究文献を参照すべきか、一目瞭然となっている至便である。

内容に即して見て行こう。「はじめに」で、著者は「鎌倉時代から今日までの平均的読者がとらえ、感じてきたであろう『宇治拾遺物語』のおもしろさの復元であり、それをなるべく簡明に記述すること」(8頁)を指すと表明する。これは、まさに言うは易くして行うは難しの代表的事例である。また、この本を「説話文学へのアプローチの仕方の一例として、たのしみ、ヒント」(10頁)にしてほしいと述べられている。具体的には二百弱ある『宇治拾遺物語』の説話の中から、著者が『宇治拾遺物語』の説話として典型的であると考える四つの説話(一三二話「清水の御帳給はる女の事」、一六四話「亀を買ひて放つ事」、七二話「以長物忌の事」、一六五話「夢買ふ人の事」)を取り上げて、II、III、IV、Vに分けて提示している。各説話に関して類話も取り上げた上で、『宇治拾遺物語』の、引いては説話文学全体の優れた入門書になっていると言えよう。さらに、円環構造という観点から「古事談」との関係にも言及されている。「ずらし」(163頁)に、『宇治拾遺物語』の本質的テーマが多く隠されているとする。

また、内容にはかかわらないが、カバー、及び表紙図は、本学付属図書館蔵の奈良絵本「うばかわ」が用いられている。気づいたときには、欣喜雀躍する思いであった。ただ、図書館に配架されるときに、カバーが廃棄されないことを祈るのみである。

(二〇一〇年八月二〇日刊 新書判 一三〇〇円 新典社)